

続
世界珍食紀行



第23回 マグリブ（北アフリカ）——幻の豚肉

渡邊 祥子

2020年4月

(2,095字)

*写真は文末に掲載しています

幻の食材

地中海世界とアフリカ大陸に開かれたマグリブの食文化は豊かだ。あまり知られていないが、マグリブの地中海沿岸部はローマ時代からワインの産地でもある。クスクスと呼ばれる主食は、セモリナ小麦から作った細かいそばろ状のパスタで、熱々に蒸しあげたものに、羊肉や鶏肉をトマトや根菜で煮込んだスープをかけていただく。山村の人々が栽培するオリーブから作った、新鮮なオリーブオイルも食卓に欠かせない。かんきつ類やイチジクなどをはじめとした果物も美味だ。魚は現地の人にはあまり珍重されないが、魚市場に行けば立派な海老やカジキなどが手に入る。筆者もマグリブに滞在して、食べ物で不満を持ったことはない。ただひとつ、この地域で暮らす外国人たちが不満をもらすのは、豚肉がないことだ。

この地域に豚がないのは、宗教的な理由による。北アフリカ・マグリブ地域の住民のマジョリティは、アラビア語を話すスンナ派ムスリムである。アルジェリアやモロッコには、アラブ人のほかにベルベル語（タマズィグト）を話すベルベル人（イマズィゲン）も居住しているが、彼らもムスリムである。ムスリム以外の宗教マイノリティとしては、ユダヤ教徒がいる。ムスリムも、ユダヤ教徒も戒律上の理由から、豚は食べない。

もうひとつの宗教マイノリティは、キリスト教徒であり、キリスト教徒は豚を食べる。しかし、同じ北アフリカでも、コプト教徒が居住するエジプトなどと違い、マグリブ地域においては、古代キリスト教の流れを引く現地系のキリスト教徒はほぼ存在しない。そこで、現在のマグリブ国籍のキリスト教徒は、植民地期にヨーロッパから移民し、その後マグリブに帰化することを選択した入植者の子孫であり、彼らの数は少ない。これらの事情から、マグ

リブにおいて現地の人の豚肉の需要はゼロに近い。

さらに、アルジェリアにおいては、1975年に豚の飼育を禁止する大統領令が公布された（私市 2009, 150）。モスクの増設、酒販売の規制強化、宗教行事への国家支援などの、1970年代のいわゆる上からのイスラーム化政策の流れのなかで、異教徒にしか需要のない豚の飼育や豚肉の生産は、非イスラーム的であるのみならず、植民地時代の遺物として否定的に捉えられたのだ。

なければ狩ってくる

このような事情から、マグリブでは豚肉を目にしない。外交官向けショップにはベーコンやハムなどが手に入るという話を聞いたが、私のような一般人には無縁の話である。町のスーパーで売られているハムは鶏肉だし、数少ない中華料理店の餃子の中味も、ジューシーな豚ではなくて少し癖のある羊肉である。

こうしたなかで、マグリブ在住の外国人たちは、工夫をこらしてこの幻の食材を入手していた。現地で迎えたある休日、日仏カップルから、イノシシが入ったから、ジビエパーティーをやるので来いといわれ、こっそりしたチリコンカンを楽しんだ。驚いたのは、彼らのイノシシ入手からパーティー開催までの手際よさだ。どうやら、山中でイノシシが狩られると、フランス人コミュニティの連絡網に知らせが飛ぶ仕組みになっているらしい。イノシシは農作物を食い荒らす害獣であり、駆除の対象になるが、村の人々はイノシシは食べないので、これを外国人が喜んで譲り受ける、という事情であるらしかった。

後日、モロッコの歴史書を読んでいて、欧米列強の経済的野心に蝕まれていた19世紀の植民地化前夜のモロッコで、アメリカ領事館の関係者が、タンジェ近郊の一農村の村人全員に保護民（大使館付き現地人職員）の地位を与え、イノシシ狩りの勢子として利用したという記述に行き当たった（Miller 2013, 43）。保護民は、外国領事館付きの通訳などに本来与えられる地位であったが、免税などのさまざまな特権が与えられたため、西欧列強諸国が現地の商人などに利益供与し、自国の利益のために利用する手段として濫用された。イノシシ狩りのために保護民制度を使うとは、19世紀のアメリカ人もよほど豚が恋しかったのだろう。■

写真の出典

- 小出真氏撮影

参考文献

- 私市正年編著. 2009. 『アルジェリアを知るための62章』 明石書店.
- Miller, Susan. 2013. *A History of Modern Morocco*. Cambridge: Cambridge University Press.

著者プロフィール

渡邊祥子 (わたなべしょうこ) アジア経済研究所地域研究センター中東研究グループ研究員。専門は北アフリカ・マグリブ地域の近現代史、特にナショナリズムの歴史。論文に“The Party of God: The Association of Algerian Muslim ‘Ulama’ in Contention with the Nationalist Movement after World War II.” *International Journal of Middle East Studies* 50 (2018).



モロッコ・ラバトの肉屋 (もちろん豚肉はない)